様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０２２４

研究課題名（和文）主格目的語に関する統語論的研究：英語と主格目的語を有する言語との比較の観点から

研究課題名（英文）Syntax of nominative objects: A view from comparative study between English and languages that bear nominative objects

研究代表者
野村　昌司（NOMURA, Masashi）

中京大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：６０４１０６１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,100,000円、（間接経費）　330,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず主格目的語を持つアイスランド語に見られる長距離再帰代名詞に関する調査を行い、主格主語と一致する長距離再帰代名詞の認可に主格付与を担う機能範疇Tが関わっていると主張した。次に主格目的語を持つ日本語の複合動詞句の統語構造を考察し、主格目的語の主格付与は主語要素への主格付与と同じ機能範疇Tが行っていると論じた。よって主格は普遍的にTにより認可され、アイスランド語や日本語のように主格目的語を持つ言語には、英語などと異なり、外項を有するが格付与を行わないvが存在し、目的語要素へのTによる主格付与を可能にしていると結論づけた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I first investigated so-called long distance reflexives in Icelandic, where nominative objects are observed and I claimed that a functional category T is related to the licensing mechanism of long distance reflexives which agree with nominative subjects. Then I scrutinized syntactic structures of complex predicate constructions in Japanese, where nominative objects are observed and I argued that the Case of the nominative object is licensed by T, which licenses the Case of the nominative subject. Therefore, I concluded that nominative Case is universally licensed by T and that languages like Icelandic and Japanese, unlike English, have a v which does not license Case but has an external argument and this syntactic object enables T to license nominative Case of the object.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：言語学　統語論　比較統語論　格

１．研究開始当初の背景

英語研究を中心として発展してきた言語理論において、主格・一致・主語・定形はすべて関連性があると考えられてきた。Chomsky (1981, 1986)では、これらはすべて一つの同じ関係を表しているものであると論じている。確かに英語を観察すると、主格と一致は主語が持つ特性であること、また文が定形か否かによってそれらも変化することを示しているようにみえる。ところがアイスランド語を観察すると、英語と同じ主格・対格言語であるにもかかわらず、主格・一致・主語・定形の関係に不一致が見受けられる。例えばアイスランド語では目的語が主格を付与され、動詞と呼応するケースが観察されている。また定形に関係なく、主格が付与されていると思われる例も観察されている。このようにアイスランド語を見ると、主格が主語と結びついているという主張や一致・定形と結びついているという考えは維持できない。また日本語は主格・対格言語ではあるが一致を持たない言語であり、アイスランド語同様、主格目的語が存在する。これらの言語と英語を区別する重要な性質を調査することにより、主格付与を中心に格付与が行われる領域に関する言語間の相違点を解明できると考える。

２．研究の目的

本研究では、英語などの言語では見られないがアイスランド語や日本語に見られる特定の構文の目的語や非定形節の主語に現れる主格に焦点をあて、その詳細な研究を通して主格付与の本質を理解することが目的である。そのため、単なる個別言語の特定の構文研究にとどまらず、格付与体系のどの部分における違いが、英語とアイスランド語・日本語との言語間の相違をもたらすのかを知るためこれらの言語を比較研究し、言語が持つ格付与体系の原理的な説明を試みている。これにより様々な言語における格付与が可能な領域に関する類型的相違点と類似点を明らかにすることができる。

英語においては、(1)のように、定形節で主語だけが主格を持ち、定形動詞との一致を引き起こす。

(1)　a.　**They** *has/**have** hired him.
　　b.　**He has**/*have been hired (by them).

定形節と異なり、(2)のように主格を持った項は非定形節には現れることが出来ない。

(2)　Mary believes him/*he to be a genius.

一方日本語やアイスランド語では、英語と同じく(1)のように主格・対格言語が持つ性質を示す一方で、(3)のようにある特定の動詞の目的語が主格目的語となり、更にアイスランド語においては動詞と一致するということが観察されている（奇態格を有する Honum は主語としての振る舞いを示し、主格を有する þeir は目的語としての振る舞いを示す)。

(3)　a.　太郎に/が英語がわかる（こと）
　　b.　Honum **mundu**　alltaf　líka
　　him.DAT would.3PL always like
　　þeir.
　　they.NOM.M.PL
　　[i.e. 'He would always like them.']
　　(Sigurðsson 2002)

また(4)のように、このような主格目的語は定形に関わらない位置、アイスランド語においては一致にも関わらない位置に現れることができる。

(4)　a.　太郎が花子を卓球が/*を上手く思った　(Tanaka 2000)
　　b.　Ég　taldi　[henni　ekki hafa
　　I.NOM believed.1SG her.DAT not　have
　　leiðst　**þeir**/*þá　].
　　bored　they.NOM/*them.ACC
　　'I believed her not to have found them
　　boring'　(Sigurðsson 2000)

(5)のように、更にはどちらの言語においても英語と異なり、非定形節の主語の位置に主格主語が現れることができる。アイスランド語においては、その主格主語が定形動詞と一致する必要がないこともわかる。

(5)　a.* It seems to me John to be a genius.
　　(cf. John seems to me to be a geinus.)
　　b.　太郎に/がまだ花子が子供に思えた
　　c.　Mér　hefur　sýnst
　　me.DAT　have.3SG　seemed
　　[**mennirnir**　vera　gagnrýndir
　　the.men.NOM.PL　to.be criticized.NOM.PL
　　ómaklega]
　　unjustly
　　'It has seemed to me that the men are
　　criticized unjustly.'　(Jónsson 1996)

こうした観察から、Nomura 2005 では「主格は時制の有無に関わらず、(非)定形節の主要部 T により付与される」という主張のもと、様々な言語事実を捉えた。

しかしながら、近年の理論的研究(Chomsky 2008 以降)ではフェイズという概念のもと、フェイズである主要部 C と v*だけが一致素性を持つと仮定し、格を付与する主要部も C（主格を付与）と v*（対格を付与）とし、フェイズの持つ一致(Agree)素性がそれぞれ T と V へ転送され一致により認可されるという提案を推し進めている。この提案によると、C を持たない非定形節で主格が付与されることはないため、(3)~(5)で示された言語事実を現在展開されている理論的枠組みで捉えることは容易ではない。よって先行研究で得ら

れた観察が正しいとすれば、この研究を近年の理論的研究の枠組みで進めていくには2つの方向性が考えられる。(i)今の理論的枠組みのままでは言語事実を捉えることができない提案であるので言語間相違を捉えられるよう修正する、(ii)観察された定形節の主語ではない項が持つ主格は、いわゆる構造格とは異なる格であり、上述の理論的枠組みで捉えるべき現象ではないということを示していく。これらいずれの可能性がより妥当であるかを知るためには、それぞれの個別言語内における関連する現象を個々に調査することはもちろんのこと、同様の現象が見られる言語における様々な格付与現象の資料を収集して、その背後にある規則性をより詳細に比較検討し、解明することが重要である。

３．研究の方法

本研究では、アイスランド語と日本語を中心に言語の性質の1つである格付与現象の本質を上述の(i)の方向性で探る。特に、１）どのような構造的条件や制約のもとで主格目的語が現れるのか、２）それらの構造的条件や制約のもと格付与体系における普遍的部分はどのような体系でなければならないのか、３）個別言語特有の要因と言語間に共通する要因をどのように区別し、観察される言語間の違いにおいてどの部分が可変的部分となるのか、という３つの点をあきらかにするよう調査を行う。具体的には格を付与する主要部と付与される項との距離、格付与領域に着目し、言語間相違が捉えられるか考察していく。これにより英語を中心として進展してきた格付与体系の理論的諸提案を再考し、個別に分析されてきた同種の言語事実を包括的に考察し、格付与体系における原理的部分と可変的部分を明確にし、新たな格付与体系のモデルを提示する。

４．研究成果

(1)　平成24年度は、まず主格目的語を持つ言語と持たない言語の統語的振る舞いの違いの1つ「長距離再帰代名詞」に関する調査を行った。主格目的語を持たない英語では見られないが、主格目的語を許す日本語やアイスランド語といった言語は長距離再帰代名詞が存在する。この長距離再帰代名詞に関するアイスランド語の研究では、統語理論だけでは解明できないとするアプローチが主流であったが、本研究において現在の理論的枠組み(Chomsky 2008)のもと、その振る舞いに統語的説明を与えた。具体的には、次の3つの点を示した。1、アイスランド語の再帰代名詞sigは解釈可能ではあるが値を持たないphi素性があるため、その値を得るために、その先行詞がAgreeの関係にある機能範疇の主要部とAgreeの関係に入らなければならない。2、sigはClitic Climbingという統語操作により、より高い位置にある機能範疇の主要部とAgreeの関係になることができる。3、subjunctive Cと非定形のCは不完全なものであり、フェイズ不可侵条件に従わない。これにより、再帰代名詞sigは長距離先行詞を有することができると論じた。
この研究で、英語等の言語では認められないフェイズを越えた統語操作がアイスランド語などでは可能であり、英語とアイスランド語における長距離再帰代名詞に関する差違はフェイズCの違いにあることがわかった。この研究が正しければ、主格目的語の有無に関してもフェイズを越えた統語操作の可否にあるというアプローチが考えられるようになる。

(2)　平成 25 年度は、主格目的語の主格が C-T により付与されるメカニズムについて研究を行った。主格目的語を持つ言語である日本語において、どのようなメカニズムから目的語に主格が付与されるのかを現在の理論的枠組み(Chomsky 2008)のもと、複合動詞句内で格付与がどのように行われるのかを考察し、目的語に主格が付与される場合とされない場合の相違点を精査し、新しい分析を提案した。具体的には、次の 3 つの点を示した。1、日本語の複合動詞句内では例えフェイズが複数介在していても、1 つのフェイズとして計算され、個別に計算されない。2、複合動詞句内における格の交替はフェイズ内で行われる操作の順序の違いから導き出されるものであり、別の追加の随意的操作などによるものではない。3、主格は普遍的に C-T により認可される。これにより、言語間相違、格の交替などに関して新たな可能性を追求した。

(3)　(1)と(2)の研究成果をもとに、今後は Chomsky 2013、Chomsky 2014 (MIT Lecture) で提案された新しい理論的枠組みのもとで、この研究がどのように捉えられるかを継続して考察していく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

① Masashi Nomura and Yuka Makita, 2013, “Defectiveness, cliticization, and long-distance reflexives in Icelandic,” Online proceedings of GLOW in Asia IX, 要旨査読有, http://faculty.human.mie-u.ac.jp/~glow_mie/proceedings_IX.html.

〔学会発表〕（計　3 件）

① Masashi Nomura, 2014 年 5 月 4 日, “Remarks on the Case-licensing of nominative objects in Japanese,” *The Tenth Workshop on Altaic Formal Linguistics*, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, MA, USA.

② 野村　昌司、2013 年 6 月 1 日、GB・

Minimalism における格理論の変遷と今、慶應言語学コロキアム(招待講演)、慶應義塾大学三田キャンパス

③ Masashi Nomura and Yuka Makita, 2012 年 9 月 5 日, “Defectiveness, cliticization, and long-distance reflexives in Icelandic,” *GLOW in Asia IX*, Mie University, Tsu, Japan.

〔図書〕（計　　1 件）

① Yoichi Miyamoto, Daiko Takahashi, Hideki Maki, Masao Ochi, Koji Sugisaki, Asako Uchibori, 2013, “Deep insights, broad perspectives: Essays in honor of Mamoru Saito: Chapter 15 Case-marking in Japanese complex predicates, 432 (309-324), 開拓社

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
野村　昌司　（NOMURA, Masashi）
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：60410619

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：